

高齢者理解における学生の学びの視点に関する研究

高田 由美 佐藤美恵子 小野麻由子 尾岸恵三子

Study on students' viewpoint of learning in elderly people's understanding

Yumi TAKADA, Mieko SATO, Mayuko ONO, Emiko OGISHI

要旨：本研究の目的は、看護学生1年生がどのような視点から高齢者を理解しているのかを明らかにすることである。学生へ祖父母など身近な高齢者の生活の現状や生活史に関するインタビューを課し、その課題レポート116部を分析対象とした。複数の研究者で課題レポートにおける学びの視点を質的に検討した結果、8つの学びの視点が見出された。

学生は、《インタビュアーとしての立場に立つ》ことで倫理的感受性が高まっており、インタビューによる教育効果を確認することができた。また、学生は一人の生活者として《現在の自己と重ねる》、《自己の将来を見据える》ことで、高齢者の強みを見出すことができていた。一方、学生は《高齢者の話を自己の価値観で解釈する》こともあり、自己の価値観や思考、感情を意識的に振り返り、事実と解釈の違いを理解することが重要であると考えられた。しかしながら、学生は高齢者が移りゆく時代背景や病気体験に対する《高齢者自身の解釈を知る》、《既存の高齢者像と照らし合わせる》ことで、豊かな高齢者像を描くこともできていた。以上のことから、学生は自発的な学ぶ視点で高齢者を理解しており、今後の教育過程において育みたい視点であると示唆された。

キーワード：高齢者理解、学生の学びの視点、インタビュー

Abstract : The aim of this study was to elucidate from what viewpoints first-year nursing students have in understanding elderly people. We gave the students assignments to hold interviews with their closely related elders, people such as grandparents and ask them about their living conditions and histories, and then analyze 116 submitted reports. Multiple researchers qualitatively evaluated the students' viewpoints for learning in these reports and identified eight such viewpoints of learning.

The students' ethical sensitivities were enhanced by 'learning as interviewers', allowing us to confirm the educational effect of an interviewing assignment. The students were able to recognize strong points of elders by "identifying the present state of the students with their stories" and "hearing such stories with an awareness of their own futures" as individuals. However, the students occasionally "interpreted the stories of the elderly people based on their own values", suggesting that it would be important to consciously reflect on one's own values, conscious awareness, and personal feelings to better understand the difference between fact and interpretation. As a result, the students succeeded in forming a positive image of elderly people by "knowing their interpretations" of the changing times, background, and illness experiencing and "comparing this with the conventional images of elderly people". Thus, the students learned through their voluntary viewpoint, a better understanding of elderly people, suggesting that it is important 'for teachers to just follow these spontaneous actions of students'.

Key words : elderly people's understanding, students' viewpoint of learning, interview

日本赤十字秋田看護大学看護学部

本研究は、第34回看護科学学会学術集会にて口頭発表した。

I. 研究背景

老年期を未だ体験していない、高齢者との触れ合いが少ないという特徴を持つ看護学生においては、インタビューを用いた教育方法は高齢者理解に有効であることが確認されている¹⁾。先行研究では、インタビューを通じて予め教員が学生へインタビューの視点を提示する方法を取っているものが多い²⁾³⁾⁴⁾。何故なら、研究の対象は低学年がほとんどであり、彼らは看護の対象を把握する枠組み（看護過程の要素）については未習得であるためではないかと推察される。

インタビューの視点を具体的に提示することは、インタビューを進める手順や内容といった方向性をイメージでき、時間を短縮するという利点がある一方、その視点に限定されたインタビューとなり、必然的に学生の学びも限定し、高齢者に対する偏った見方になる可能性も否めない。看護実践は看護師側の意図によって、ある枠組みを患者にあてはめるという方法ではなく、あるがままの相手の中に看護の必要性を見出すことが望まれる⁵⁾。こうした看護師の対象に対するとらえ方は看護実践を方向づけるため⁶⁾⁷⁾、看護師が対象をどのように理解するのかが重要な課題といえる。

本来、人は対象となる人が見えているものを自分の心の中で、その人の身になって、その人の「内側」から見るができる存在⁸⁾である。そして、学生はこれまでに培った生活体験の中で、多少なりとも高齢者との触れ合いがあり、学生個々の高齢者観を持っている状態だと考えられる。我々は、これらの準備状態を備えた学生は自らの高齢者観から湧き出た興味や関心に基づき、高齢者へのインタビューを展開することが可能であると考えた。そこで、学生が自らの視点をを用いたインタビューを実施し、高齢者理解へと繋げることを目的とした課題を設定した。

先行研究では、インタビューにより学生の捉えた高齢者像の抽出や、高齢者との相互作用からの気づきに対する知見は得られているが、学生がどのような視点から対象を理解しているのかは検討されていない。看護基礎教育においては対象の何をどう見て、どう解釈・判断するのか、その思考の枠組み（視点）とプロセスを把握する⁹⁾ことが重要とされている。よって、学生がどのような視点から高齢者を理解しているのかを知ることは、学生の思考の特徴の把握となり、さらに今後の高齢者理解に対する教育的関わりへ重要な示唆を与えることと考える。

II. 研究目的

本研究の目的は、看護学生1年生がどのような学びの視点から高齢者を理解しているのかを明らかにすることである。

III. 用語の定義

本研究において、学びの視点を次のように定義した。

学びの視点とは、学生が高齢者に対するインタビュー内容を解釈するための見方や考え方とする。

IV. 研究方法

1. 調査対象

A看護大学1年生116名の記述した課題レポート

2. 調査時期

平成25年12月から6月

3. データ収集方法

1) 課題の提示方法

冬期休暇の課題として、身近にいる高齢者へ「生活の現状や生活史」についてインタビューし、学びをレポートへまとめるように提示した。学生の多くは祖父母を対象とすることが予想されたため、インタビュアーとインタビューイとの間の良好な関係性が形成されていることが条件である、非構造的インタビューが可能であると考えた。加えて、学生の生活体験で湧き出た興味・関心に基づいたインタビューを展開することで、高齢者を様々な視点から理解するという教育的意図も含まれていた。

2) 授業での取り組み

この課題に先立ち、老年看護学概論の授業において、学生へ生活史とインタビュー技法について教授した。学生は様々な視点から課題に取り組むと考えられたため、授業内で学生116名から提出されたレポートのタイトルを整理した一覧を配布した。学生間でこのタイトル一覧から興味・関心を持ったレポートの内容を互いに紹介することで、クラス全体で個人の学びを共有するように考慮した。

4. 分析方法（図1）

看護学生1年生の「高齢者の生活の現状や生活史」についてインタビューした学びのレポート116部を分析対象とし、2つの過程で分析を行った。

1) 分析1

複数の研究者でレポートの記述内容を熟読し、「高齢者へのインタビューからの学び」を分析単位としてコード化し、質的に類似するものを整理することで〈学生の学び〉を捉えた。

2) 分析2

複数の研究者でレポートの記述内容を熟読し、学生は高齢者から聴いた話をどのような見方や考え方で解釈をし、どのような〈学生の学び〉を得ているのかを慎重に検討し、学びの視点を見出した。

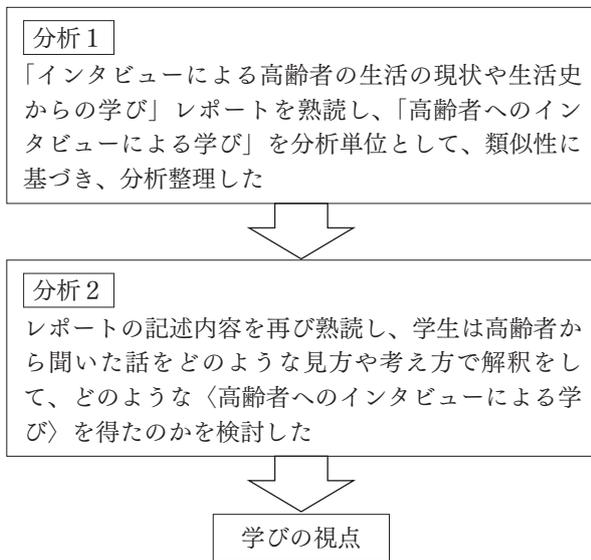


図1 分析方法

5. 倫理的配慮

本研究の実施にあたり、学生に対して、研究の目的と意義を説明し、課題レポートを分析対象とすること、データの匿名性を保障することを約束し、了解と異議ある場合の申し出を求めることで倫理的な配慮に努めた。なお、この説明については授業担当者がレポート評価を済ませた時点で行い、学生の授業評価への影響を排除するように努めた。

V. 結果

学生2名は近隣に住む高齢者を対象としていたが、それ以外の学生全員は祖父母を対象としたインタビューを実施していた。学生のレポートから「高齢者へのインタビューによる学び」を示す箇所は195コードであり、内容の類似性に基づき〈学生の学び〉は14カテゴリーを構成した。次に、学

生のレポートの記述に立ち戻り、学生は高齢者から聴いた話をどのような見方や考え方で解釈し、これらの〈学生の学び〉を得ているのかを検討した結果、8つの《学びの視点》が見出された(表1)。

以下に、学生はどのような《学びの視点》から、どのような〈学生の学び〉を得たのかを説明する。学びの視点については《 》、学生の学びを示すカテゴリーは〈 〉、学生の学びの記述内容については「 」で示す。なお、原文に「 」があった箇所は『 』へ変換をした。

1. 学生の学びの視点

1) 《インタビュアーとしての立場に立つ》

学生は課題を通して、人生の先輩として尊敬すべき存在から貴重な話を聴く場となり、《インタビュアーとしての立場に立つ》ことによって、〈高齢者の人生経験を聴く姿勢〉を学んでいた。

今回、学生のほとんどは祖父母を対象としたインタビューを実施していたため、近親者同士の慣れ合いでインタビューが展開しても不思議ではない状態であった。しかし、祖父母の孫や学生という立場ではなく、1人のインタビュアーとしての立場に立ち、インタビューにおける基本的な姿勢を学び取っていた。

学生は、インタビューを通し「昔祖母から聴いた戦争の話を聞きたいと祖母に言うと、『もう言いたくない、思い出したくない』と言われた。それを聴いて今まで私は祖母の気持ちを考えずにいろいろと聞いてしまった事に気がつき反省した」ことを想起していた。そして、今回のインタビューのまとめとして、「体験者にとっては辛い記憶を呼び起こすことになるので、聞き手の配慮が必要」であると、インタビューによる高齢者に及ぼす不利益を把握し、その対応について考えることができていた。

2) 《高齢者自身による解釈を知る》

学生は、高齢者の生きてきた背景や病気体験などに対する《高齢者自身による解釈を知る》という考え方によって、高齢者は〈社会の変化を実感〉、〈理想と現実のギャップによる揺れ〉、〈老いの受容〉をしていることを理解できていた。

学生は、高齢者に話を聴くことで、「社会

表1 学びの視点から得られた結果

《インタビュー者としての立場に立つ》

高齢者の人生経験を聞く姿勢	体験者から体験を聞くことは大事なことであるが、体験者にとってはつらい記憶を呼び起こすことになるので、聞き手の配慮が大切だということをこのとき学んだ。 昔祖母から聴いた戦争の話を知りたいと祖母にいうと、「もう言いたくない、思い出したくない」といわれた。それを聴いて今まで私は祖母の気持ちを考えずにいろいろと聞いてしまったことに気がつき反省した。
---------------	--

《高齢者自身による解釈を知る》

社会の変化を実感	社会進出する年齢にも違いがあった。 昔と現在では食事や生活面での豊かさに違いがあった。 人間関係の違いがあった。
理想と現実のギャップによる揺れ	祖母は「まさかこれぐらいで折れるとはびっくりしたね。…できることが減って情けないね。本当だったら自分で全部やりたいんだけどね。」と話していた。祖母の場合は、家事をしなくなり家以外に行くこともほとんどなくなったので、生きがいを感じられない。これは大きな課題だ。
老いの受容	昔は何も問題がなかったことであるが、徐々に悪くなっていくというのは、高齢者は辛いことであると同時に仕方ないことであると感じていた。

《高齢者の話を自己の価値観で解釈する》

老いという変化と向き合い人生を充実させる	人生がとても充実しているように感じた。
前向きに生きていくと映った	これからも元気に働きたいと言っていて、前向きであった。 私はインタビューしてYさんは老年期を迎え、仕事からも引退し、やりがいや奥さんを看取って自分の役割を失い、喪失感を感じているのではと思っていたが、実際は違っていてとても前向きであった。

《現在の自己と重ねる》

<歳月でも変わらない人間関係において重要なこと>	状況は違えども、祖父の慣れないことへの不安、知り合いになかなか会えないときの不安はとても共感した。 ありきたりなことですが、年を重ねてもなお大切ということは、それほど人間関係においては必要なものであることを再確認しました。
--------------------------	--

《自己の将来を見据える》

高齢者の生きる力	ずっと家にいるのではなく外に出たり、趣味や楽しいことをすることで生きがい生まれると思われる。
生きることの学び	これから生きていく中でもいろいろなことが起きると思うが、祖母のようにいろいろなことに一生懸命チャレンジしていけるような人になりたい。

《既存の高齢者像と照らし合わせる》

新たな高齢者の姿を描く	趣味に時間を費やすこともでき、満足した生活を送っているように見えるが、自身の老いを感じるたびに、一人暮らしでの今後不安もその分あるのだとわかった。
これまでの人生の積み重ねがある	大きな出来事やその時代のあらゆる傾向がその時代を生きた人の生活に影響を与えている。 過去の話と今の生活ぶりを聴き、昔があるから今できていると理解できる。

《看護学生として、今後の学習の方向性を考える》

老年看護を学ぶことへの方向づけと意欲	高齢者の見方が変わった。すべてをやってあげることではない。 このような環境で生活できる私はとても恵まれていると改めて感じた。この環境を無駄にしないように学業に励みたいと思った。
対象理解における生活史の重要性	相手の考えを理解するために、育った時代背景、環境を考慮することが必要だと感じた。 生活史を知ることで老いという概念で捉えるのではなく、一人一人の人間として高齢者の姿を正しく理解する必要があると気づいた。

《次世代を担う者の役割を認識する》

高齢者のための社会を創る意味	祖母はせつかくの休みに申し訳ないと感じるようだ。やはりお年寄りには周囲のサポートが必要であり、私たちが力にならなければならない。
----------------	--

注) 表の構成

《》 学びの視点

「インタビューによる学び」を類似性に基づき、分析整理した学生の学び	学生が、インタビュー内容を学びの視点で考えた「高齢者へのインタビューによる学び」の内容
-----------------------------------	---

進出する年齢にも違いがあった]、「昔と現在では食事や生活面での豊かさの違い」、「人間関係の違い」など、様々な背景を概観していた。そして、現在とはかなり異なる背景を生きてきた高齢者から「今はあたりまえのことが幸せ」であると《高齢者自身による解釈を知る》ことで、高齢者が〈社会の変化を実感〉していると納得していた。

学生は、祖母から骨折した当時のことを「まさかこれぐらいで折れるとはびっくりしたね。治ってからもそれからは自分の足でどこかに出かけることもなくなったし。できる事が減って情けない」という話を聞き、高齢者は〈理想と現実のギャップによる揺れ〉を感じていることを理解していた。また、インタビューにより「昔は何も問題がなかったことであるが、徐々に悪くなっていくというのは、高齢者は辛いことであると同時に仕方がないことであると感じていた」と〈老いの受容〉にも気づけていた。

3) 《高齢者の話を自己の価値観で解釈する》

学生は、《高齢者の話を自己の価値観で解釈する》という考え方で、高齢者は〈老いという変化と向き合い人生を充実させる〉、〈前向きに生きていくと映った〉と意味づけていた。

学生はインタビューを通し、「高齢者の見方が変わった」、「老いというものは悪いものではないなと思えるようになった」と自己の高齢者に対する価値観が変化したことを述べていた。その一方、高齢者から聴いた話を「人生がとても充実しているように感じた」、「これからも元気に働きたいと言っていて、前向きであった」、「私はインタビューしてYさんは老年期を迎え、仕事からも引退し、やりがいや奥さんを看取って自分の役割を失い、喪失感を感じているのではと思っていましたが、実際は違ってとても前向きであった」と自己の価値観によって解釈をしていた。高齢者へこれらの解釈の妥当性を確認する行為は記述されていなかった。

4) 《現在の自己と重ねる》

学生は高齢者から聴いた話と《現在の自己と重ねる》という考え方で、〈歳月でも変わらない人間関係において重要なこと〉を見出していた。

学生は、高齢者の話と自己の体験を重ねて

考えることで、「状況は違えども、祖父の慣れないことへの不安、知り合いになかなか会えないときの不安はとても共感」し、「他人と関わる時は、相手の気持ちを考えることが大切」という年月を経ても変わらない人間関係において重要なことに触れることができていた。そして、「ありきたりなことですが、年を重ねてもなお大切ということは、それほど人間関係においては必要なものであることを再確認しました」と、あらゆる世代に共通する事柄を確認することができていた。

5) 《自己の将来を見据える》

学生は、高齢者の話の延長線上へ《自分の将来を見据える》という考え方で、〈高齢者の生きる力〉、〈生きることの学び〉を見出ししていた。

学生は、「これから生きていく中でもいろいろなことが起きると思うが、祖母のようにいろいろなことに一生懸命チャレンジしていけるような人になりたい」と、祖母の話の延長線上に将来の自分を見据えた目標を考えていた。そして、人生の先輩である祖母は『生きる事の素晴らしさを教えてくれた』と〈生きることの学び〉を得ていた。また、「目標を持つことが長生きすること」、「興味があることに意思を持って挑戦し、目標を成し遂げようと努力することが大切だと学んだ」と、〈高齢者の生きる力〉を掴み取っていた。

6) 《既存の高齢者像と照らし合わせる》

学生は、インタビューを通した高齢者像と《既存の高齢者像と照らし合わせる》見方から、〈新たな高齢者の姿を描く〉、〈これまでの人生の積み重ねがある〉ことを学んでいた。

学生は、高齢者が「趣味に時間を費やすこともでき、満足した生活を送っているように見えるが、自身の老いを感じるたびに、1人暮らしでの今後も不安もその分あるのだとわかった」と〈新たな高齢者の姿を描く〉ようになっていた。新たな高齢者の姿を知ることには、「(私は)あまり祖母を知らなかった」という気づきに繋がっていた。

学生は「大きな出来事やその時代のあらゆる傾向がその時代を生きた人の生活に影響を与えている」「戦争、生活史が人を造る」とその人らしさを生み出すものを学んでいた。また、過去の出来事の中で「人間関係は人生

を左右する」「家庭、家族の存在は物事のとりえ方に影響する」と、人間関係が考え方や生き方へ影響することを理解していた。さらに「過去の話と今の生活ぶりを聴き、昔があるから今できていると理解できる」、「現在の姿にはこれまで生きていた過程がある」と、目の前にいる高齢者の現在の状態は過去の出来事が重なって創り上げたものと納得していた。

7) 《看護学生としての今後の学習の方向性を考える》

学生は高齢者に対するインタビューを通じて、《看護学生としての今後の学習の方向性を考える》ことで、〈老年看護を学ぶことへの方向づけと意欲〉、〈対象理解における生活史の重要性〉に気づいていた。

学生は「高齢者の見方が変わった。全てをやってあげるということではない」と、高齢者におけるセルフケアの重要性に気づいていた。また、学生は高齢者へのインタビューを通じ「このような環境で生活できる私はとても恵まれていると改めて感じた。この環境を無駄にしないように学業に励みたいと思った」と今後の学びへの意欲を持っていた。また、「相手の考えを理解するために、育った時代背景、環境を考慮することが必要だと感じた」、「生活史を知ることで老いと言う概念で捉えるのではなく、一人一人の人間として高齢者の姿を正しく理解する必要があると気づいた」と生活史の重要性にも気づいていた。

8) 《次世代を担う者の役割を認識する》

学生は、高齢者からインタビューで話を聴く中で、《次世代を担う役割を認識する》という見方から、〈高齢者のための社会を創る意味〉を見出していた。

学生は「祖母はせつかくの休みに申し訳ないと感じるそう。やはりお年寄りには周囲のサポートが必要であり、私たちが力にならなければならない」と次世代を担う自分達の役割を認識していた。そして、「高齢者の1人暮らしは人とのコミュニケーションが少なくなるので、ヘルパーなどの存在が必要である」「健康を保ち続けるために大切だと思うので、それを支える環境づくりが大切だと考えた」と〈高齢者のための社会を創る意味〉を見出していた。

VI. 考 察

本研究では、看護学生1年生が高齢者を理解するうえで、様々な学びの視点を持っていることを明らかにすることができた。将来、学生が看護専門職として高齢者と関わることをねらいに、これらの学びの視点の特徴を活かした教育をどのように深化させたらよいかを考察する。

1. インタビューの教育的効果

インタビューでは、研究参加者との動的な相互作用のなかで、常に倫理的な感受性を研ぎ澄まししておかなければならない¹⁰⁾。今回、学生は《インタビュアーとしての立場に立つ》ことにより、対象者である祖父母への配慮の必要性を学んでいた。学生は「昔祖母から聴いた戦争の話を聞きたいと祖母に言うと、『もう言いたくない、思い出したくない』と言われた。それを聴いて今まで私は祖母の気持ちを考えずにいろいろと聞いてしまった事に気がつき反省した」という体験をしていた。そして、今回のインタビューのまとめとして、「体験者にとっては辛い記憶を呼び起こすことになるので、聞き手の配慮が必要」であると、インタビューによる高齢者に及ぼす不利益を把握し、対応について考えられていた。言い換えると、日常の些細な出来事の積み重ねの上で、倫理的な問題の存在を認識することとその問題への誠実な対応がごく自然のこととして理解できていたと考えられる。インタビューは高齢者との相互作用の中で展開される特徴を持つため、倫理的感受性を高めるには最適な方法ではないかと示唆された。その際、倫理的感受性は個人の言語的・非言語的行為を解釈し、その人が何を必要としているかを明らかにし、その人に適切な方法で反応することが基本¹¹⁾となる。その人へ善をなすためには何をすべきか、まずは自分自身を省みて己をよく知り、より良い状態とは何かを常に求め続けることが必要となる。このためには、相手との言葉のやり取りを通じて少しずつ相手を受け入れ、自分の誤りに気づき、理想の高みへと近づいていく、いわば対話を通じて物事の本質を見抜く¹²⁾ 訓練を継続することが重要であると考えられる。

2. 自己理解の発見の場

学生は、高齢者の話を「(高齢者は) これからも元気で働きたいとっており、前向きであった」と自己の価値観で意味づけしていた。先行研究¹³⁾においても、高齢者へ生活史を聴取すること

で、学生は高齢者が想像していた以上に前向きな考えや生き方をしていると肯定的に受けとめていることが明らかになっている。これは高齢者に対する価値観を変換させるが、それと同時に、学生と高齢者相互の認識にはズレが生じている可能性もある。しかしながら、学生の価値観は学生自身の考え方や経験に裏打ちされた内容であり、これらを丹念に吟味することで自己理解を促すことへ繋がる。奥野¹⁴⁾は、否定的な高齢者観であっても、肯定的にしようと焦って試みるよりも、「なぜそのような高齢者観を持つのか」と、自己洞察することを推奨している。よって、インタビューによる学びを共有した後で、学生が相手の言動を価値づけている自己の価値観や思考、感情を意識的に振り返る場面を設けることで、自己理解が深まり高齢者観を豊かにする教育効果を生み出すと示唆された。

また、看護援助という観点からは、《高齢者の話を自己の価値観で意味づける》視点は、対象者の反応を先入観や自分の思いで断定することへ繋がる可能性がある。初学者の行うアセスメントには、事実と思い込みの混同がしばしばみられるという指摘¹⁵⁾もある。今後の高齢者理解に関する教育において、捉えた事実とその事実をどのように対象者が解釈や判断をしているのかに着目するために、対象者との関係構築はもとより、対象者との対話における思考を柔軟にし、自己の価値観に偏っていないかどうかを吟味することが必要であると示唆された。

3. 様々な立場からの対象理解

F.ナイチンゲール¹⁶⁾は、「自分自身は決して感じたことのない他人の感情のただ中へ自己を投入する努力」を看護師に必要な能力としている。そして、常に患者の位置に立つ訓練を重ねていくことで、良い看護者に育っていくということを述べている。本研究では、学生は高齢者が移りゆく時代背景や病気体験、加齢による変化を通じて、現在はどのような気持ちでいるのかといった《高齢者自身の解釈を知る》視点を持ち、対象者の認識に着目することができていた。これは、インタビューとインタビューアは親密性の高い家族関係であり、祖父母は孫からのインタビューであったからこそ自己の心境を語った可能性が考えられる。

高齢者の認識に影響をもたらしたであろうその人の体験した出来事を聴く事は、学生自身をその

体験下に身を置き換えることにも繋がっていた。学生は、高齢者の体験した出来事と《現在の自分と重ねる》ことで、その時々の高齢者の感情と共感し、その人が人間関係において重要としている内容に触れることができていた。金城ら¹⁷⁾は患者の立場に立つ訓練として、他人の体験を聴きながら自己の体験として取り入れることを意識的に日常生活の中で行う必要性を述べている。本研究では、学生は意図せずとも、高齢者の体験とその人自身の解釈に耳を傾ける行為が自然にできており、教員はこの行為を見守っていき教育的な意味で抽象化することが重要であると示唆される。

また、学生は高齢者からの話の延長線上に《自己の将来を見据える》視点を持つことで、〈高齢者の生きる力〉や〈生きることの学び〉を見出していた。看護教育では、学生が対象の何をどう見て、どう解釈・判断するのかを把握することは重要である。従来看護過程の考えでは、看護問題を「患者の望ましい状態と現在の状態とのずれ」として捉えてきて、「マイナス」を見つけるところへ焦点が当たりがちであるという指摘¹⁸⁾がある。本研究では、学生は1人の生活者としての立場から、自己の将来を見据えた視点を持つことができていた。これは、その人の問題探しに奔走せず、その人自身のあり様を深く見つめることとなり、結果として対象者のもつ力、強みを見出したのではないかと考えられる。今後、実習等で、学生には高齢者自身がどのようなあり様であるのか、その人から話を聴くにあたり自分自身の将来を見据えた視点が持てるように見守ることが重要であると示唆された。

VII. 結論

本研究の結果、次のようなことが明らかになった。

1. 学生は自発的に、高齢者の体験とその人自身の解釈を考えることができており、今後の教育過程で大切に育みたい学びの視点であると考えられた。
2. 学生は1人の生活者として、高齢者の話に自己の将来を見据える視点を持っており、その人の強みを見出すことに繋がっていた。
3. インタビューを用いた、高齢者を理解する教育方法は、学生の倫理的な感受性を育成するには有効であることが示唆された。
4. 今後の高齢者理解に関する教育において、学

生が高齢者の話を価値づけている自己の価値観や思考、感情を意識的に振り返るように指導することが課題である。

謝 辞

本研究にご協力頂きましたA看護大学の学生の皆様に深く感謝いたします。

利益相反

本研究において利益相反に該当する事項はない。

文 献

- 1 吉本知恵, 横川絹恵, 一原由美子. 看護学生の高齢者理解を深めるための教育方法—在宅高齢者へのインタビューからの学び—. 香川県立医療短期大学紀要. 2002; 4: 105–111.
- 2 森仁美, 松下光子, 坪内美奈, 米増直美, 菱田一恵, 大井靖子. 他. 「生活歴の聴き取り体験」による対象理解に関する学びの内容. 岐阜県立看護大学紀要. 2002; 2 (1): 111–116.
- 3 前掲 1
- 4 大内澄江, 今井弥生, 平田玲子, 鳥山早苗, 富沢悦子. 高齢者インタビューから見た看護学生の高齢者への気づき—学生の高齢者理解へのプロセスを知る—. 日本看護学会論文老年看護. 2010; 41: 160–163.
- 5 前川幸子. 看護学生の「患者理解」という経験に関する記述 ガダマーの解釈学を手がかりに. 看護研究. 2002; 45(4): 356–367.
- 6 上野恭子, 栗原加代: 入院中の精神疾患患者に対する看護師の認知と専門的ケア行動選択に関する研究. 日本看護研究学会雑誌. 2005; 28(1): 73–82.
- 7 長岡さとみ, 大淵律子: 介護老人保健施設における看護師の認知症高齢者ケア場面のとらえ方とケア行動の特徴. 老年看護学. 2013; 17(2): 47–57.
- 8 佐伯胖. 「学ぶ」ということの意味. 岩波書店. 東京. 1995: 81.
- 9 中西純子. 初学者におけるアセスメントのピットホールと回避のための教育. 看護診断. 2010; 15(1): 57–61.
- 10 グレグ美鈴, 麻原きよみ, 横山美江編. よくわかる質的研究の進め方・まとめ方. 医歯薬出版. 東京, 2007. 45.

- 11 フライ S. T. ジョンソン M-J. (片田典子, 山本あい子訳) 看護実践の倫理, 倫理的意思決定のためのガイド. 日本看護協会出版会. 東京, 1998.
- 12 江藤裕之. 看護・ことば・コンセプト. 文光堂, 東京. 2005: 81.
- 13 小泉美佐子, 伊藤まゆみ, 宮本美佐子. 老年看護学の対象理解にライフヒストリー・インタビューをとり入れた学習効果. 老年看護学. 2000; 5(1): 140–146.
- 14 奥野茂代. 老年看護における高齢者観の再考. 老年看護学. 2002; 7(1): 5–12.
- 15 前掲 9
- 16 F. ナイチンゲール (湯槇ます・薄井担子・小玉香津子訳). 看護覚え書. 現代社, 東京, 1968.
- 17 金城忍, 山本利江, 野口美和子, 嘉手苅英子. 慢性疾患患者への看護における立場の変換に関する一考察. 沖縄県立看護大紀要. 2002; 3: 45–56.
- 18 前掲 9